

---

**嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。**

雷雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

### 【Nコード】

N3818P

### 【作者名】

雷雲

### 【あらすじ】

中学二年の佐藤浩太は佐々木麗美に恋心を抱いていた。  
ある日、佐藤浩太は下校中の時に男と佐々木麗美が共に居る事を見する……

駄文ですが宜しくお願いします。

俺は牛乳を一気飲みして鞆と冷めてしまった食パンを持ち、玄関で靴を履いていた。

タイムリミットは俺の母親が自室を覗くまで。あれが見つかって捕まえられたら一巻の終わりだ。

「何急いでるのよ。あ、まさか……」

母親が階段を駆け上がる。早く家を出たほうがよさそうだな、こりゃ。

「こらあああああ！！ この嘘つき浩太！！」

やばい、気付かれた。さっさと行こう。

俺は扉を開けて「いってきます」と言っただけで家を出た。これくらい言っておかないと後のお叱りがもっとやばくなる。

俺はコツコツコツと階段を駆け下りて次の階段へと続く約150mの下り坂を走って行った。

前までは結構きつかったが最近は慣れてきたのか息が切れなかった。

陸上部に入ろうかな……

でも棒高跳びもあるしな……

俺は平均ぐらいの身長だからな……

そんな事を考えながら次の階段を下っていると後ろからクラスメイト以上友達以下の奴が来た。

「よっす！」

「……おう。」

「なんだ！ 元気ないな」

大きな目に濃い眉毛、鼻筋は……普通。たらこ唇のこいつは鈴木健。

コイツのテンションには毎回疲れる。なぜか俺の登校時間とこいつの登校時間は決まって同じなのだ。

まさか監視してるとか……んなわけないな。

「それでさあ……昨日発売された新作ゲームの

」

また始まりやがった。鈴木健のネタばれ情報。

鈴木の子はどつかの大企業の社長らしく、家は豪邸でかなりの金持ち。その唯一の息子であるこいつはその有り余った金をゲームに使って、一か月に五個はゲームを買う。そして新作ゲームが出た時はすぐに予約して、発売日にはすぐに行列に並ぶ、かなりのゲーマーだ。（本人談）

そんなどうでもいい話を聞きながら、俺は学校へと向かうのだった……。

学校。

勉強だけの理由では絶対行かないこの場所。

その廊下に俺は立っているのだった……。

俺がこの場所にいる理由は後ろの教室にいる同じ学年の佐々木麗美と言う女の子。その横にある鞆では特大の大人気キャラクターのストラップがぶら下がっている。

その人と会ったのは入学式で偶然隣に座ったとき。俺は幸運だと思っていた。

一瞬でこの人が好きになった。一目ぼれと言うことだ。

俺はこの人と学校にいたいと言う理由でこの場所に来ていた。

彼女は友達と雑談を楽しんでいる。一瞬彼女の視線がこちらを向く。

その一瞬が永遠になればいいのに。そう思いながら僕は視線を逸らした。

俺が視線を逸らした理由は彼女に俺の気持ちを知られたくなかったら。もし知られたら彼女はおそらくただでさえ少ない俺との交流を避け、そのまま卒業式を迎えてしまっただろう。そんなことは嫌だ。

俺の気持ちは一生彼女に伝わらないかもしれない。だけど、同じ場所で居れるこの時間は大切にしたいのだ。

彼女は絶え間なく雑談を続ける。俺はそれを見て、窓から外の風景を覗いた。

外は山と森ばかりで麓には小さなアパートや公園が多数あった。その右端ぐらいに俺の家が見える。

空気は澄んでいて都会とはかけ離れた風景だ。後ろの窓からは小さな町が見えるだろう。

ド田舎ではないが、まあ普通の田舎だ。俺が生まれてから親は都会からこちらに引越したらしい。俺には何故そうしたかいまだに分からない。

窓から見える風景を見ながらボーツしていると、横からまた別のクラスメイト以上友達以下の別の奴が来た。

俺に親友は居るのか？……いや、いないな。

「なあ、俺が貸したあのゲーム、まだ返してもらってないぞ」

ああ、そうだった。こいつから格闘ゲームを借りてたんだった。

「あ……明日返すよ」

「それ昨日も一昨日も聞いたぞ。」

言ったっけ？ まあいいや……

「大丈夫。明日には必ず返すよ。」

「それ、昨日聞いた。」

これも言ったような気がしない。

「……明日には絶対返すよ。返さなかったら弁償すつからさ。」

「その言葉絶対忘れないからな」

その超しつこい奴は隣の教室へと入って行った。それにしても、何故あんなことを言ってしまったんだ俺は。

……取りあえずメモ帳に書いておくか。

俺はポケットからメモ帳とペンを取り出し、メモ帳に11月20日に鉄拳をしつこい奴に返すと書いて、教室へと向かった。

下校。

これほど嬉しい時間は他にはない。やっとゲーム三昧できる家へと向かえるのだ。

俺は学校から飛び出し、駆け出した。

それにしても疲れた……やっぱ走れないわ。

俺は走るのをやめ、歩くようにした。それでもまだ息が切れていく。

俺が右へと角を曲がろうとした時、あの彼女がいた。

なんでここに？ あいつの家はここから反対方向にあるはず……  
(こっそり確認済み)



その時、高校生ぐらいの髪を赤色に染めた男が彼女に寄ってきた。そして楽しげに話しあう。

まさかの彼氏ですか。

俺はしゃがんで物陰に隠れこっそり見ていることにした。

彼女は鞆を持っている。下校時にあの男と会ったらしい。

憎たらしい……なんであんな不良みたいな奴と！俺の方がよっぽどいいぞー！

心の中で叫んでみたが、俺は自分の方がよっぽどいいという自信は無いことに気付いた。

馬鹿だな……俺。

そんなことより、俺は高校生が酔ったようにフラフラしていることに気付いた。

本当に酔ってるかもな。あんな不良みたいな奴は。その時、男がバイクに寄りかかりバイクはその重量で倒れてしまった。

そしてなんと男は彼女をバイクの方へ押し倒して逃げてしまった。

やばい……あいつに殺意持ちっちゃった。

彼女もすぐさま周りを見て逃げて行く。

……まあバイクは一人じゃ持ち上げられないから当たり前前だよな。  
種類によるけど。

その一分後、どっかの集団がバイクに集まってきた。

巨体の男がフェンスに蹴りを入れる。

あれは……暴走族？

……………ヤバいな。

俺はその場から離れることにした。

帰宅。

これほど嬉しい時間は他にはない。（ちょっと前言ったような……）  
……）  
だけど、今日はいやなものがおまけでついていた。

「さて、理由を聞かせて。」

拷問らしき感じの母親の説教。俺はそれを半分聞き流し、自室へ行った。

自室はかなり汚い。床にプリントが散らばっている。

俺はプリントを角に寄せて、椅子にもたれかかった。

あの暴走族たち、今はどうしているだろうか……

彼女の事を見ていなければいいが……

それにしてもあの赤い髪の男はなぜ彼女を押したんだろう。

やはり捕まりたくなかったからか……そして彼女を置いてきぼりに……

彼氏失格だな。

「っしやあああああああ!!」

あつ、声に出してしまった。まあいいか。

「御飯よ〜」

俺は立ち上がり扉を開けて階段を下りてリビングへと向かった

朝。

窓から明かりが差し込み、俺は目を覚ます。

俺は横に置いてある音楽プレーヤーに繋いであるヘッドホンをつけ、ベッドから起きた。

かかっている音楽は結構激しい曲で、目ざましには丁度いいかもしれない。

そして俺は黙々と部屋を片付け始める。昨日あの説教で絶対片付けることを約束してしまったからだ。

十分後、俺は掃除を終わらせ、下へと降りた。

「おはよう。」

母親がそう言ったのでこちらもおはようと返す。

「掃除してきたのよね、あの音からすると」

「ああ。」

俺は椅子に座り、机にあったパンを食べ始める。

「あ、そういえば」

俺は階段を上がり、自室に戻った。そして棚に置いていた格闘ゲームを机に置いていた鞆に入れて、その鞆を持ってリビングへと戻った。危うく忘れる所だった……

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

俺はコップに注がれた牛乳を飲み干し、洗面台へと向かった。俺の顔が鏡に映る。

ニキビが気になるな……

俺は歯を磨いて、顔を洗った。そしてまた自室へと戻った。

俺は制服に着替え、すべての準備を終わらせた。

あゝだるかった。

俺は家を出て階段を降りた。そのまま坂を下りて二度目の階段を降りる。

鈴木は……いた。階段の下で待ってる。

……違う道に行くつ。

俺は坂を上がって、森の坂道へと向かった。右には人気のない寺があり、昼でも薄暗い。

そこにあの昨日いた暴走族がいた。その巨体の男が俺に近づいてきた。

「これを持ったやつを探してるんだが……しらねえか？」

男が持っていたのはあの彼女が持っていたストラップだった。

このままこいつらが探し続けるといつか必ず彼女がバイクを倒したことになるだろう。

そうなったら彼女が暴行を受けることは目に見えている。

俺は次の言葉を言った。

「俺が……持つてる。」

「こんな趣味をしているとは変わったもんだ……」

俺はそのまま相手から暴行を受けることになった。

十分後。

ドサッ……

「ぐっ……」

「中身は取らなかったんだから感謝しろ。じゃあな」

俺は所々にあざができるだろう。

血がついた口を手で拭き、近くの公園へと向かった。

俺は嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

だが、それでもいい。彼女を守ったのだから。

それなら悔いはない……

俺は後に一か月病院に留まることとなった……

嘘は人が生きていれば必ずするものである。

一生嘘をつかない人間などいない。

そして嘘は何かを守るための人にとっての大切な感情から表れる行動である。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3818p/>

---

嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

2010年12月9日00時22分発行